

氏名（本籍）	スエ フサ シ ノ 末 房 志 野（広島県）		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第116号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位論文等題目	作品 プリミティブ・イラストレーション 論文 プリミティブ・イラストレーション - メディアを通して増殖するプリミティブな表現 -		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	助教授（美術学部）	蓮 見 智 幸
（論文第1副査）	武蔵野美術大学	教授（造形学部）	森 山 明 子
（作品第1副査）	東京芸術大学	”（美術学部）	宮 下 安 弘
（副査）	”	”（”）	中 島 千 波
（”）	”	”（”）	尾 登 誠 一
（”）	”	助教授（”）	箕 浦 昇 一
（”）	多摩美術大学	教授（”）	秋 山 孝

（論文内容の要旨）

造形表現に携わるものにとって、誰もが経験することだと思うが、偶然生み出した効果が表現の新しい飛躍をもたらしてくれることがある。自分自身予期しない形態や色調が画面の上に現れたり、また予想もしない技術や技法が突然獲得できたりする驚きと喜びは他に喩えようもない。そういう発見の積み重ねが表現の深化となるのだと思う。

私の場合がそうであった。自分のイラストレーションの表現について模索し、絵の具の表現に限界を感じていたころ、偶然手元にあったハンダ用のコテを紙に押し当ててみると、焦げ臭いにおいととも、黒く焼け焦げた小さな穴とその周囲の茶褐色の微妙な色調とが出現した。自分の手によって作り出されたその痕跡の美しさは、私にとって新しい発見であった。

この焼け焦げによる表現は私に新しい方法を与えてくれた。焦げ痕の“穴”は“線”になり、さまざまな形の輪郭線になった。私は画面を切り裂いたり穴を空けたりして作品を制作するようになった。表現の内容と表現の技法は不可分の関係にある。この技法を獲得したことで私の表現はより単純なもの、より自然なもの、より原初的なものを目指すようになった。このことは今日に至るまで私の中で変わっていない。

より単純なもの、より自然なもの、より原初的なものへの私の関心は、当然のことながら先史美術、民族美術などいわゆるプリミティブ・アートへの興味を抱かせた。それらの美術は形がシンプルで力強く、訴求力を強く持っている。素朴な表現であるにも関わらず動的で迫りに満ちている。あどけなさに似た親しみやすい表現のなかに強いメッセージが感じられる。メッセージは単純なものほど伝わりやすく、また同時に単純で的確な表現ほど難しいものはない。自分の作品

をできるだけ単純で明快にしたいと考えていた私に、それらは造形上の多くの示唆を与えてくれているように思われたからである。

これが私の創作の拠り所となっている。すなわち、自分のイラストレーション表現に、プリミティブ・アートの明快で強いメッセージ性を取り込みたいということである。そこで、改めてプリミティブ・アートを自分がどのように理解しているかを整理し、プリミティブ・アートについて考察を加えておく必要が生じた。

本論文の意図することは、先史時代の洞窟壁画や岩壁画などを中心とする先史美術や民族美術など、プリミティブ・アートを考察するとともに、私の作品を通して、創作の姿勢を明らかにするものである。

本論文は以下のような構成と内容になっている。

第1章の今日のプリミティビズムと自然回帰では、プリミティブ・アートとはどのようなものが、また、プリミティブを志向するプリミティビズムが時代と共にどのように拡大したかについて考察するとともに、今日におけるプリミティビズムとして考えられる「自然回帰」現象についても考察を試みた。

第2章のプリミティブな造形の特徴—その造形性が生み出すメッセージ性の強さにおいては、プリミティブ・アートの中でも洞窟壁画や岩壁画を中心に、描かれた目的やモチーフなどの造形要素の特徴やその造形が生み出すメッセージ性について考察した。

第3章のプリミティブな表現を求めて—私の制作記録では、私の主たる技法である「焼き焦げ」の技法について述べるとともに、焼き焦げた「痕」の発見からその「痕」が表現に変わるまでの展開を述べた。その表現は、「穴」「線」「残滓」によって分類することができる。また、制作において不可欠な道具や素材であるハンダこて、紙や色についても明らかにし、私の創作の姿勢を示した。

私はこの「焼き焦げ」という技法を獲得したことで、私が表現したいと考えていたものがはっきりと見えてきたのだと考えている。以前から関心を持っていた先史美術の洞窟壁画やさまざまな民族美術などのいわゆるプリミティブ・アートと、自分が表現したいものが感覚的に一致してくるように思われたのだ。焼け焦げという技法の発見が、プリミティブな表現への関心と重なり、プリミティブ・イラストレーションに向かうことになったのである。

第4章のメディアを通して増殖するイラストレーション表現では、グラフィックデザインにおけるイラストレーション表現の特色について考察し、プリミティブな表現との関係について述べた。

イラストレーションはグラフィックデザインにおいて重要な役割を果たしてきた。その理由は「言葉によらないメッセージの伝達が可能であること」「瞬時に多くの情報を明らかにすることができること」「見えないものまで可視化できること」があげられる。また、イラストレーションはメディアを通じた表現であることも考察し、プリミティブな表現が、現代のイラストレーション表現においてどう活きるのか、その可能性について私の制作を通して、示した。

最後に結として、この研究によって得られたプリミティブなもの、私の作品と表現、及び今日におけるイラストレーションとの関係についてまとめるとともに、今後の私の創作の方向について述べた。